とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在地	千代田区神田神保町 2-20 SP 神保町第 2 ビル 1 階
園名	小学館アカデミー神保町保育園

1．活動のテーマ

＜テーマ＞

音

＜テーマの設定理由＞

1 歳児は、自分の動作によって周囲に変化が起こることに強い関心を持つ時期。音を出す、という直接的な体験を通じて、聴覚的な刺激と「自分でできた」という達成感を結びつけ、五感を育むことを目的とした。
指先の発達： 小さなものを「つまむ」「離す」「穴に入れる」動作を通じて、手指の巧緻性を高める。
音の識別： 鈴、ビーズ、アルミホイルなど、素材によって異なる「落ちる音」の違いに気づく。
集中力と達成感： 狙った場所に落とす達成感と、繰り返しの心地よさを味わう。
さまざまな知育楽習を行っているドラキッズ活動に取り組んでいるため、さらに子どもたちの表現を高め、音への探求心を深めたいと思いテーマを設定した。

2．活動スケジュール

子どもの姿・探究の様子
初期（5-8 月） 空き箱やタッパーのくり抜きに入れること自体が難しく、手全体で押し込もうとする。音が鳴ると驚いて手を止める。穴を大きめに設定。音が鳴るたびに「あ、チリンって言ったね」と声をかけ、因果関係に気づかせる。
中期（9-12 月） 指先でつまむ動作が安定。特定の音（鈴）を気に入り、そればかり選んで落とす「選択」が始まる。素材を複数用意し、音の違いを楽しめるよう配置。アルミホイルの感触と音のギャップに注目させる。
後期（1-3 月） 落とすスピードを変えたり、耳を澄ませて音を待つ姿が見られる。お友だちと交互に落として笑い合う。言葉での表現（「きれい」「大きいね」）を促す。
・月 3 回の活動で、子どもたちの様子を講師に伝えてカリキュラムに組み込んでいく。

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材道具】
発砲スチロール、アルミホイル、空き箱、アルミで出来た入れ物、袋、つまようじ、ビーズ、アルミホイル、お米、乾燥とうもろこしの粒、鈴、フワフワボール、マカロニ、記録用スマートフォン、講師による保育実践で活用した教材、絵カード
【環境設定】
・環境：素材は自由に手に取れるよう、高さを配慮して配置。
安全に配慮し、尖ったものがないか確認済みの素材を使用。
・5 月より月 3 回の活動を設定する。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

・毎週、保育者は講師と一緒に子どもたちの自我を認め自分でやりたい気持ち・意欲を確認している。
・さまざまな音を楽しむ子どもたちの姿に、いろんな素材を用意し、擬音語で伝えるように援助した。
・音を楽しめるようになると、マラカスを作って一緒に合奏を楽しんだり、保育者の手拍子に合わせて楽しんだ。
・秋になって、戸外活動が盛んになると、自然の中で（公園）のどんぐりが落ちる音や重なる音・落ち葉を踏んだ時の音などいろんな音を探して、探求した。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

子供の言葉・姿	写真
・はじめに保育士から話を聞く時には、子どもたちは壁を背中にじっと座っていたが、保育士がマラカス作りに必要なものを見せ始めると前のめりになって前に前に出てきた。 ・お米や鈴などいろんな音が出るものを個々に容器に入れて作ったが大きい音を好む子どもや小さい音を好む子どもや１人ひとりに好みが分かれていた。音を楽しむよりもマラカス作りの方に興味があった子どももいたが、音の違いに気がつくといろんなマラカスを振っていた。 ・友だちが持っているマラカスを欲しいときには、両手で「かして」が出来ていた。貸してもらえるとおじぎをしたりと貸し借りが出来ている様子を見ることが出来た。 ・ずっと１つのマラカスの音が気に入って振っていた子どもがいたので歌を歌うと、保育士が振っていたマラカスをまねて、同じように振りはじめた。それをみた、別の子どもも同じように振り出し、全員でマラカスを振って合奏になった。みんなで合奏（集会）友だちが鳴らす音を聞き、顔を見合わせて笑い合う姿が見られた。 複数の音が重なる心地よさを伝え、一体感を感じられる雰囲気作りを意識した。保育者の手拍子に合わせて、身体全体でマラカスをふるなど、個々での表現も大きく違った。 	

振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

「音」への集中：　単なるぽっとん落としに「音の素材」を加えたことで、子どもの集中時間が大幅に伸びたのを感じた。特に鈴は、さまざまな素材の中での人気があり、取り合いになるほどだった。そのうちに鈴を箱やタッパーに入れると子ども自ら「チリン」と言葉を発するようになった。

活動の視点：　視覚（色の違い）だけでなく、聴覚（音の違い）を意識させることで、1 歳児なりの「仮説と検証（これを落としたらどんな音がするかな？）」の芽生えを感じることが出来た。

保育者の気づき：　1 歳児は「叩く」「振る」といった単純な動作でも、強弱や素材の違いで音が変わることに深い興味を示した。正解を求めず、「なんでだろうね」と一緒に考える姿勢が、子どもたちのさらなる探究心を引き出すことに繋がると再確認した。

5 月から３月までの一年間、ぽっとん落としというシンプルな遊びの中に、鈴やアルミホイルといった『音』の要素を加えることで、子どもたちの探究心は大きく膨らんだ。アルミホイルのカサカサという音に目を輝かせ、鈴の音に耳を澄ませる子どもたちの姿は、日常の中にある小さな発見を全身で楽しむ『楽習』そのものだと感じた。今後も、子どもたちの『知りたい・やってみたい』という心の根っこを大切に講師と保育者が一緒になって取り組んでいきたい。